

## 実践に向かう意欲を高めるために

上 廣 哲 治

各地の朝起会場には、熱心な実践者が必ずいらっしやいます。「より善い生活」を実現させるために地道な実践に取り組み、着実に成果を上げておられる方です。そのような方々の存在を、私はひそかに誇りに感じています。わが会の会友は、現状の生活に満足することなく、「さらに善く」「もっと善く」を目指して、仕合わせな生活を実現しようと、自発的に実践の日々を選んだ方々です。その意味で、誰もが実践への旺盛な情熱を持っているはずですが、

名誉会長は常々、「情熱こそ実践の命である」と会友を鼓舞してこられました。ですから、たとえどのような状態にあらうとも、会友の胸の底には熱い情熱の熾火が燃えているに違いありません。

ところが残念なことに、かつて情熱を持って実践に取り組んでいた方が意欲を失い、迷妄する姿を目にすることがあります。がんばって実践してきたけれども思うような成果を上げられない。自分の力になさき気づき自信を失った。目標を見失ってしまった。そこにはさまざまな理由や事情があるのでしよう。だからといって、やる気を失ったまま惰性で実践をしていたのでは、実践の楽しみも喜びもなく、成果も上がりません。情熱を取り戻し、今まで以上に実践意欲を高めなければなりません。

では、どうすれば意欲を掻き立て、やる気を起こすことができるのでしょうか。

「経営の神様」といわれた松下幸之助は、まだ会社が小さかった頃、どうすれば工場で働く従業員の意欲を高めることができるかを考え、悩んでいました。工場では完成した電球を一つ一つ磨いてケースに入れて出荷する仕事をしています。単調な仕事なので従業員たちはやる気が薄く、しぶしぶ働いているように見えました。そこで彼は、いかにもやる気のなさそうな従業員のそばに行つて、「君の仕事はええ仕事やなあ」と声をかけたのです。言われた人は、ただ電球を磨くだけの仕事のどこがいいのか、と疑問を感じたかもしれません。彼はさらに言います。「君の磨いたこの電球な、どこで光るか知っているか?」。そして次のような話をしたそうです。

ある家で子どもが夢中になつて本を読んでいる。やがて日が沈み、外が暗くなると、当然、室内も暗くなり、文字は見えなくなる。もし電球がなかったら、その子は本の続きを読むことができないだろう。でも、子どもの頭上に電球が一つ灯つたら、本を読み続けることができる。

そして、最後にこう付け加えました。「あんたは電球を磨いているのやないで、子どもたちの夢を磨いているのや。子どもたちの笑い声が聞こえんか」

松下幸之助は従業員の意欲を高めるために、その仕事にはどのような意味があるのかを、目に見え、耳に聞こえるかのように説明してみせたのです。電球を磨くという単調な仕事でも、人を喜ばせることができる。その喜びが意欲を高めます。

私はこれまで機会をとらえては、「楽しくなければ実践ではない。喜びがなければ倫理の実践ではない」と言い続けてまいりました。ある時、若い方に「楽しい実践って何ですか?」と聞かれました。楽

しい実践があれば、それから始めようというのでしょうか。

でも、それは順序が違います。先に楽しさがあつて、だからその実践をするというのではなく、まず実践をすると、そこからさまざまな楽しみや喜びが生まれてくるのです。今までできなかったことができるようになった、家族の笑顔が増えた、周りの人から感謝され頼りにされた、人間関係が円滑になった、仕事がかどるようになったなど、ほんの些細な喜びや小さな楽しみかもしれませんが、それが私たちの実践へのエネルギーになり、意欲を高めることになるのです。

ところが、必ず目標を達成しなければならぬという強い責任感が、意外にも実践への意欲を削ぐことがあります。責任感を持つことは大切ですし、そうであつていただきたいと思えます。ただあまりに目標の達成だけに執着すると、実践は目標を達成するための手段となり、実践それ自体にある楽しみや喜びが失われてしまうのではないのでしょうか。実践が難行苦行となつてしまふ。そしてやがて意欲が衰えてしまふというわけです。

山頂を目指す人は、すぐに頂いただきに着くような楽な道などないことを知っています。そして登山の楽しみは山頂を極めることだけではないことも知つて居るのです。山頂に至るまでの景観を楽しみ、草花を愛で、一步一步着実に歩くという行為、それ自体に楽しみと喜びを感じているのです。

我々の実践も同じではないでしょうか。実践で達成したい目標はもちろんあります。それは何としても達成したい。しかしながら、それがすべてではないということです。実践すること自体に充実と楽しみ、喜びと学びがあり、それが豊かな経験となつて人間力を高め、人格を向上させ、「より善い生活」を実現させるのです。

山に登る途中で疲労がたまつたり、脚あしに変調をきたしたりしたらどうするでしょうか。遭難や事故を防ぐために登頂を諦めて下山という判断をします。山頂を極めることは大切ですが、無事な登山をすることはもつと大切です。危険だと思えば下山する勇氣を持たねばならないのです。

実践においても、「何事も努力すれば必ずできる。何としても目標を達成せよ」と唱える方はいますが、いかに努力しても、どうしてもできないことがあるのも事実です。大切なのは、できたかできなかったかではなく、「努力をしたという事実」です。結果としてできなかったことは現実として受け容れ、努力できた喜びを十分に感じていただきたいのです。努力したというその経験が必ずどこかで役に立つ時がきます。それが努力で培つちかった力なのです。家事でも仕事でも勉強でも、一生懸命がんばったけれど、うまくいかないことはあるでしょう。その時は結果に悲観するのではなく、がんばれたことを喜び、樂觀していただきたいのです。できなかったことをよく悔やむのではなく、どんなに小さなことでも、できたことを喜ぶ——これが実践に向かう意欲を高める要諦ようていであり、私自身が心がけていることでもあるのです。ですから、「楽しくなければ実践ではない。喜びがなければ倫理の実践ではない」と申し上げているのですが、共感いただけますでしょうか。

では最後に今月の実践課題です。大きな目標を決めたら、その目標に至る道筋に、数多くの小さな実現しやすい目標を設定しましょう。比較的容易な目標の達成を積み重ねることが、やがて大きな目標の達成へとつながるからです。例えば、家族一人ひとりの顔を思い浮かべ、何か一つ家族愛の実践を試みてください。家族の笑顔が返ってきたら目標達成です。愛する家族の笑顔と喜びが、次なる実践へチャレンジする意欲を高めるでしょう。